

---

# 真っ白け

頼白井

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真っ白け

### 【Nコード】

N1938B

### 【作者名】

頬白井

### 【あらすじ】

文化祭に展示するモニュメント。朝来たらなんと真っ白に塗られてしまった！作業は再開出来るけど、犯人を野放しにしてたら、また白くされてしまうかも。なんとも不思議に中途半端な出来事を、新聞部が調査する。

## （前書き）

この作品はフィクションであり、  
実在の団体、人物とは関係ありません。

夏休みも終盤になると、七星高校のいたるところから金槌の音が聞こえてくる。二学期が始まってすぐ、文化祭というイベントがあるからだ。

ところが、そのような体育会系の喧噪とは無縁な部屋がある。

窓という窓を、ドアというドアを全て開け放ったその部屋では、男女一人ずつ計二人という団体として最小限の人員が、パソコンのキーボードを必死に叩いている。もちろん金槌ではなく、左右十本の指で、だ。

「暑い……」

男女の女、若干児童よりの少女が愚痴をこぼす。扇風機二台をフル回転させているというのに、体育着という通気性のいい物を着ているのに、だ。

「……ゴルゴムの仕業か？ 地球温暖化作戦、とか」

男……というか少年の方が言う。地球の温暖化は確かに進んでいるが、決してゴルゴムの仕業ではない。人の業だ。

「……大丈夫リユート？ なんでもゴルゴムのせいになると、末期らしいよ？」

「そうなのか。なんの末期かは知らないが……キングストーンを埋め込まれたりはしてないから平気だ」

リユートと呼ばれた少年は、そう言うておどけてみせる。暑い中、集中をずっと続けていると参ってしまったため、このような会話を休憩のように使っている。

「週刊で新聞発行して、文化祭も一般向け配布するってアナウンスしておく、文化祭前にクラスの手伝いしなくても、誰にも咎められなくていいね」

「全校で二人だけ、って有名だもんね、新聞部」

「その代わり、『キツそう』って、誰も来ない。まあ、変なのが来

られるよりマシだが」

「リユートより変な人はいないんじゃない？」

「マサキがいるだろ」

「えーっと、ドングリが背を比べながら五十歩か百歩かをバカにしあつて、目やにが鼻くそを笑つてる感じ？」

「……ツクシ、回りくどい言い回しで失礼なこと言うな」

ツクシと呼ばれた少女は“そうかな？”と言わんばかりだが、廊下からの声が思考を遮った。

「お、サクリュー いるじゃん」

声の主は、ズカズカと部室に侵入してくる。“サクリュー”は少年、桜井龍人<sup>さくらいりゅうじん</sup>のあだ名であり、この名で呼ぶ者は一人しかいない。

「マサキ、ノックくらいしろ」

噂をすればなんとやら。件の“マサキ”こと一条正樹<sup>いちじょう まさき</sup>である。細い体つきと、頭に被ったウッドランド迷彩のバンダナが非常に目立つ。制服のズボンをはいているが、至るところに青やら緑やら、ペンキらしき汚れが多々あるので、どこであっても迷彩効果はゼロだ。

「あ、ゴメン、サクリュー」

正樹は部室の外に出て、引き戸を閉める。

軽く二回、ノック音が聞こえた。

「カギは開いてるぞ、マサキ」

引き戸が開き、正樹が部屋に入る。

「オースス！ サクリュー、よくオレだつて解つたなあ」

「ノックの音の間隔とか質、音程が独特だからね」

「つてかさつき入ってきたじゃん！」

ツクシのツツコミはもつともだが……。

「で、なんの用だ？ マサキ」

龍人は話を進める。なんとなくツクシの目が三角形に近づいた感じだが、ツツコミ共々無視した。

「体育館開けて」

「先生にカギ借りろ」

「カギがない」

「ならどうして俺だ？」

「体育館に侵入出来るから」

「……まるで俺が泥棒みたいじゃないか」

「違法でもいいよ。オレが許す」

「マサキが許しても警察が許さない……っつか」

「っつか？」

「そこにカギがあるから貸してやる」

龍人が指差した方に、校内の大半のカギが置いてある。校長の許可を得てコピーしたものだ。

「なんでそんなに？」

「取材の度にカギ借りるのが面倒だから。まあ、校長室と職員室、各種教科室と事務室に……あと更衣室はムリだったけど」

「なんだ。試験問題とかゲットできると思ったのに」

「……そういうのを防ぐためだ」

むしろ、全てのカギが揃っている方が安心出来ない。

「マサキくん、体育館で何があったの？」

一段落したところで、ツクシが訊いた。やはり、興味を引く対象だ。

「文化祭で展示するモニュメントを体育館で作ってる。作業しに来たら、カギがないってことで、こうして借りに来た。ツツシイが好きそうなイヴェントは無いよ」

春日ツクシ（かすが つくし）を“ツツシイ”と呼ぶのもまた、

正樹だけだ。

「なーんだ」

「ま、平和でいいじゃないか」

「そだね」

「じゃサクリュー、カギ借りてくぞ」

「ああ、他のヤツに渡すなよ」

「なんで？」

「無くされると困る」

「りょーかい」

そう言つて、正樹は部室から出ていった。廊下から響いてくる足音から察するに、全力疾走だろう。部室から体育館までの距離を考えると有酸素運動が望ましいが、“マサキなら無酸素運動でも行ける”と、龍人は考えてしまう。

「マサキだから二年五組か……クソ！ 『モニュメントの展示』じやコンセプトが解らん。五組に椎名くんと高梨くんがいるから、少し楽しみだつたんだが」

龍人はパソコンのディスプレイを見ながら言う。二学期開始と同時に配布する予定の“文化祭特集”の作業をしているので、ちょうど表示されているのだ。

「去年の文化祭の展示部門、同点で賞を分け合つてたもんね」

「去年の文化祭。椎名雄二しいな ゆうじを中心とした一年一組と、高梨文也たかなし ふみやを中心とした一年二組がモニュメント制作で激突。互いにしのぎを削り、高めあつた結果が、ツクシの発言通り同点。

その二人が、今回の文化祭で手を組む。

「だから楽しみだし、盛り上がるから良いけど……なんか陰謀が見え隠れするクラス分けだよな」

「そーね。ライバル同士が手を組むなんて、ゼータみたい」

「そうだな。まあ、そんなプレッシャーがあるから、作業の開始が早いのかもしれんな」

「あ、そーいえばもう作業始めてるんだね」

「そう言うツクシのクラスは……『メイド&バトラー喫茶』かメイドと執事が給仕をする店だね。準備はいいのか？」

「いいんじゃない？ まあ、準備あつても行けないけど」

結局、どんなイベントも新聞部は新聞部優先。他にいないから仕方ない。

「それにしても、この企画よく通つたな。確か『メイド喫茶』って風営法やらなにやらで、十八歳未満は立ち入り禁止とか……調べて

ないから判らんが」

「企画通すためと、ネタのために男子がメイドさん、女子が執事さんのカツコをするから平気みたいよ」

「……それなら良いのかもしれないが、どの層に訴える商売なのか見えないな……」

「……ほら、女装美男子萌えとか、男装っ娘萌えとか……」

「……まあ、異様な空間にならないことを祈っておくよ」

すると、廊下から、やはり全力疾走の足音が聞こえてくる。

「ねえリユート。これ、マサキくんじゃ……？」

「『カギが見つかったから返しに来た』という展開希望」

やがて足音が、開け放たれた引き戸に達すると、一瞬だけ正樹の姿が見え、そして全力疾走の勢いそのままに引き戸が閉められた。派手な音をたて、部屋が揺れたような感覚が襲いかかり……。

軽く二回、戸を叩く音。

「開いてるぞ、マサキ」

「って今閉めた！」

「よくオレだって解ったな」

「ノックの間隔や音の質、音程が独特だからね」

「ってか一瞬見えたり！」

律儀にもツツコミを入れるツクシ。だが、龍人はそれを無視する。

「で、カギを返しに来たのかな？」

「違う違う。大変な事が！」

「そうか、大変だな」

「リユート、訊かなくていいの？」

龍人は黙る。普段なら“大変な事なら用件を先に言え”と言うところだ。しかし、その“大変な事”に龍人を巻き込もうと、正樹が全力疾走をしてきたのは明白。

龍人としては、その思惑通りに巻き込まれるのは、面白くない。

だから軽い抵抗として、受動的な巻き込まれ方を選択した。

しかし、結局は“軽い抵抗”の範囲を出ない。

「モニュメントにイタズラされたんだよ」

正樹が言い出すのが、ほんの数秒遅くなったくらいだ。

「……ゴルゴムの仕業か……」

「それは違う」

ツクシがツツコミを入れて、調査開始ということになった。

龍人とデジタル一眼のカメラを持ったツクシ、そして正樹の三人が体育館に着くと、四人、生徒がいた。全員二年五組の生徒で、正樹と同じく、文化祭のモニュメント制作作業のために登校して来たのだろうが……どうもケンカのようにみえる。

その中心は、件の椎名雄二と高梨文也。

雄二はデザイン性よりも生産性を重視したメガネをかけている。放っておいたらこうなった、と言わんばかりの髪は、耳も目もかかるくらい長く、メガネの着脱が少々大変そうだ。連日の快晴にも、あまり日焼けしておらず、病弱な感じがあるが、背の高い男子生徒が必死になって止めるくらい、勢いよく文也に飛びかかるようにしている。

文也は対照的に、メガネはかけていない。髪は短めで、スレンダーではあるが、不健康ではない印象だ。まともにケンカをしたら文也の方が勝つだろう。しかし、ケンカをさせないために女子生徒が止めている。

慌てて駆け寄った龍人たちに気づいたのか、雄二を羽交い締めに行っている男子が口を開く。

「ちょ……この二人止めてくれ！」

それを聞き終えるかどうかという頃には、龍人が口を開いていた。「ケンカするのは勝手だが、後で出来ることは後でやってくれ。俺はケンカの仲裁に来たんじゃない」

穏やかに、静かに、そしてハッキリと。エキサイトしている人間

には、怒鳴りつけるより効果がある。

「つつーわけで……連れてきたぞ、新聞部」

ケンカが収まったところで正樹が言うと、雄二を羽交い締めにしていた男子生徒が龍人に向き、口を開く。

「なんか、新聞沙汰もいいトコだな。あんま変なこと書かないでくれよ」

内容は少々問題だが、口調はそうでもない。

「そんなこと言わないで。新聞部さんだって、夏休みに登校してるくらい忙しいのに、わざわざ来てもらったのよ？」

女子生徒がマジメに返した。だが、新聞部の呼称は“新聞部さん”だ。会社の営業みたいな呼び方だが、去る高名な神主にして陰陽師の古本屋が、古本屋の屋号で呼ばれているような物と考え、特にツッコミは入れない。が、この先もずっと“新聞部さん”と呼ばれるのは何かと不便だし、龍人とツクシのどちらを示しているのかが解らない。

ということ、その場の全員に名刺を渡した。もちろん、ツクシと正樹以外の、だ。

「さくらい……たつひと？」

「りゅうと。と読めます」

「ああ、ごめんなさい。私は……」

「ああ、平気です。この場にいる全員、名前知ってますから」

先ほど“新聞沙汰云々”と言ったのは松平隆幸で、まつだいら たかゆき特に部活動に所属はしていない。髪を茶に染めたり、ピアスをしたりと、見た目上はチャラチャラしているが、夏休みにもかかわらず文化祭の準備に出席するなど、好感が持てる。この様子では、“新聞沙汰”発言も、ただのジョークだろう。

ちなみに、“松平”は、徳川家のイントネーションではない。

「そっか。じゃあ現場を見て貰おうぜ」

その隆幸が口を開く。なかなか冷静に物を見ることが出来るようだ。見た目のギャップが、より顕著に感じられる。

「そ……そーだったわね。桜井くん、見て貰える？」

ポニーテイルにした女子生徒、先ほど“新聞部さん”と呼んだ彼女が言う。

身長が平均より少々高めこの女子生徒は、せきやま なつき関山夏希。いまは指定のスカートにポロシャツを着ているが、作業中は体育着か何かを着ているのだろう。スカートにペンキなどの汚れが見当たらない辺りから、それが伺える。

「じゃあ、現場を見てみますか。ツクシ、カメラ」

「……もう撮り始めてるけど？」

先ほどからツクシの姿が見えないと思ったら、すでに現場で写真を撮っていた。図らずも、龍人の名刺を陽動にして、ツクシに現場を撮影させた形になる。

「……ツクシ……『気が利く』の域を出て、軽くやりすぎだぞ」

「ん……まあ、結果は一緒だからいいんじゃない？」

ツクシはまったく悪びれもしない。

「……スマン。事後承諾になるけど、撮影していいかな？」

「いいんじゃない？ 他のクラスのヤツに見せなきゃ」

隆幸が同意したことについて、他のメンバは特に文句を言わない。これでツクシは大手を振って撮影が出来る。……気にしているのは龍人だけかも知れないが。

「じゃあ、俺も見させて貰うよ」

とは言っても、否が応でもさつきから目につく。結構広めに展開されたブルーシートの上に、直径で二メートル位の半球が数個。どう考えても、これが“モニュメント”だろう。

「一見何も……ああ、そういうことか」

モニュメント制作の作業中に“大変なこと”が起きたのだから、てつかり破壊されるなどのレベルだと、龍人は思い込んでいた。だが違う。

このモニュメントは、作業途中にも関わらず、真っ白なのだ。それでは正樹のズボンに付いていた塗料の説明がつかない。

「ツクシ、それ、全部白に塗装されてるのか？」

「うん。近くで見ればすぐ解るよ……ってことだから、別に推理する必要なかったんじゃない？」

「違和感を覚えたその直後に違和感の正体が解ったんだから、不可抗力だ」

言いながらモニメントに近づく。確かに、近くで見れば白に塗装されているのが簡単に解る。また、白塗装前の青が見える箇所もあるんで、イタズラの内容はこれで間違いない。

「つまり、白に塗装した犯人を探せと？」

「マサに訊かなかったのか？」

隆幸のセリフはもつとも。だが、龍人はあえて訊かなかったし、正樹は正樹で詳細は言わなかった。又聞きによる、第三者の偏見や勘違いの情報を遮断するためである。

「こっただけ塗るには結構な量必要だが……白ペンキ、そんなにあるのか？」

「白はあるけど、うちのペンキは手付かずだね」

「……となると、被害はこれだけか」

「うん」

夏希が首肯する。その他誰も異義を唱えないので、その通りだろう。

「……つまり、白く塗られたただけだな？」

「うん」

同じく。

「……半端だな」

半端。一言でこの被害を評するなら、このほかに妥当な言葉は見つからない。

「半端？」

夏希が聞き返す。もつとも、他の連中も似たような反応だが。

「仮に妨害だしたら、復元不能なほどに壊すなりした方がいい。

その方が作業時間だって早いしな。だから、犯人の心理として、時

間がかかってダメージの少ない『塗装』を選ぶとは、とても思えない」

「じゃあ、犯人は？」

何も調べていない段階で、夏希が質問する。

「誰かは解りません。どんな人かも解りません。ただ、目的は妨害ではないと思います。これは『塗装』されてます。ただ真っ白にするのであれば、ペンキをぶちまければいい。だが実際は、ムラや欠けはあっても、ハケでキレイに塗られている」

「じゃあ、犯人は妨害でも何でもなく、白く塗ったってことか？」  
正樹が訊き返す。

「俺がやったんじゃないから解んねえって。っていうか、犯人を探せばいいのか？」

「がんばれサクリュー」

「……軽く言ってくれるな」

「『輝く最強展示物大賞』獲ったら、独占インタビューしていいから」

「学校の広報誌のインタビューは受けるよ。それに、賞の名前も違うし」

「『輝け』だった？」

「いや、もう全面的に」

「そっか。まあいいじゃん」

「そうだな。いま問題なのは犯人か。作業の再開は出来るけど、犯人を野放しにしてたら、またリセットさせられるかも知れないからな」

龍人は関係者の証言を求め、メモ帳に書き留める準備をした。

「皆さんの、昨日の行動を教えてください」

「俺たちを疑ってんのかよ？」

「形式的な物ですから、ご協力お願いします」

と、それ自体が形式的なやり取りをして、証言を促す。

「昨日もこのメンバで作業しましたか？」

「そう……だな」

少し考える素振りをした後、隆幸は答えた。他に異議を唱える者はいないので、その通りなのだろう。

「他のクラスメイトは何もしないのか？」

クラスで参加しているイベントで、クラスの一部の一部しか作業していない。やる気がないのか、文也と雄二に任せっきりののか。「夏休みだし、『来い』って、強く言えないし……ムリに強制して、ジヤマな連中が来るのはイヤだね」

隆幸の発言は、どこかで聞いたような考え方だ。

「つまり、自由参加にしたら、このメンバが集まった、と」

理由は何であれ、作業に参加している生徒は一条正樹、松平隆幸、関山夏希、椎名雄二、高梨文也の五名だけであることは確かのようにだ。

「んじゃ、昨日の行動……特に下校のときだな。教えてくれ」

「細かいことは覚えてないけど、いつも五時位に先生が来て、下校しなきゃいけないってなるよ。それから、道具を片付けて戸締まりをして帰ってるよ」

答えたのは夏希だ。

「それぞれの係は決まってるのか？」

「片付けはみんなでやるけど、カギは一番早く来たヤツが借りて、そのまま持つて……終わったら職員室に返しに行く。だから毎日誰が何するは決まってるけど、昨日のカギはナツだったな」

隆幸は重要な情報を教えてくれた。少なくとも昨日は、夏希がカギを管理していたということ。

「いや、待てよ。カギはみんなで返しに行ったんだぜ？ 先生も職員室の戸締まりしなきゃってんで、一緒にいたよ。体育館だってドアが全部閉まってるのは、昨日帰る前に確認したし、今朝も全部閉

まっつた」

自分の発言によつて、夏希の立場を危うくしてしまったからなのか、隆幸は少々慌てた感じで弁護する。

「つまり、昨日の下校時にカギは職員室にあつたが、今朝は無かつた。これは確実だね？」

「ああ。確実だ」

ウソではないだろう。実際、正樹が新聞部にカギを借りに来ていた。

「今朝は誰が一番に来た？」

「オレ」

「マサキかよ」

「誰もいなかったから、カギを借りに職員室に行つて……それでカギがないから、誰かが借りたと思つて体育館に戻つた。そしたらマツペイとナツキイがいて……やっぱカギがない。だから蹴破ろうとしたんだけど、止められた」

体育館の扉は鉄製。正樹はこれを蹴破ろうとしたのか。

「……マサキ……お前、赤心少林拳使えたっけ？」

「何だそれ？」

「鉄壁を砕くキックだ」

「気にしないでマサキくん。フィクションだから」

「ツクシ……鉄扉を蹴破ろうという発想も充分にフィクションだぞ、この男」

「後で考えたら、弁償高そうだな」

「ああ、破れるのは確定なんだな」

「しゃーないから、マツペイとナツキイと話して、サクリューンとこに行つたんだ」

「マサキくんストップ！『マツペイ』と『ナツキイ』って？」

ツクシが割つて入る。龍人は、それらが誰のあだ名かは解つていた。が、勘違いという可能性もあるので、黙っている。

「隆幸と夏希。ついでに雄二が『イナユウ』で、文也が『タツカン』

ね」

「……そこまで訊いてないけど、言ってくれて助かったよ」

雄二も文也も、どちらも訊かなければ解りにくいあだ名だ。特に、“しいな”から“いな”を採用するとはとても思えない。普通なら“稲垣”や“稲田”などのあだ名に使う。

「まあ、それはいいとして、椎名くんと高梨くんは何時頃来た？」

「僕は……ついさっき……」

いままでずっと黙っていた雄二が、ようやく口を開いたと思った。蚊の鳴くような声。去年、彼にインタビューをしたときも似たようなもので、最初は別の生徒がしゃばっていた。そのとき、始めはしゃばりの生徒がメインだと思った龍人だったが、取材で核心に触れていくにつれて、ようやく雄二がメインだったと気づいた。龍人が気づかねば、手柄はしゃばりの生徒に取られていたかもしれない。

「あー大体俺と同じような時間だな。俺の前を歩いてたから」

同じく、ずっと黙っていた文也が言う。声は元気だが、あまり外交的では無いのかもしれない。

「ん。声かけなかったのか？ ケンカはこの惨状を見てからだろう？」  
非常に些細なことだが、訊かずにいられない。一緒に作業をしているのだ。話しかけるくらい、しそうなものだ。まあ、二人ともあまり外交的とは言えないから、不思議でもない。

ところが、隆幸が口を出したことで、些細なことではなくなった。  
「ったく。仲直りしてないのかよ」

仲直り。

仲直りと言うからには、今朝よりも前にケンカでもしたのだろうか。

「……これは譲れないよ……もう白くなっちゃったけど」

「椎名が塗ったんじゃないのか？ 俺の色遣いに文句つけてきたじゃないか」

解りやすい。芸術性の相違に因るケンカなのだろう。まあ、金銭

のトラブルを“音楽性の相違”としてバンドから脱退するメンバーは、高尚な理由だが。今朝のケンカもその延長線上にあるのだろうが、相手を犯人扱いするのはいただけない。

「……お二人がケンカするのは勝手だが、そうやって主観が入って冤罪から取り返しのつかないことになっても俺は知らん。が、どんなケンカか、くらいは教えてくれ」

「えっと……高梨くんが僕の担当の所の色遣いに文句を言ってきた……それで」

「俺のイメージでは全体が青なんだ。いきなり赤入れるなよ」

「だったら最初から担当を半々にしないでよ」

「椎名がやりたいって言ったんだろぅが」

「僕だって僕の作りたいモノがあるんだ」

放っておくと手が出そうだ。とりあえずケンカの原因やいきさつ、内容まで解ったので、止めないと大変だ。

「バカにするな。ケンカまで再現しないで解る」

いささか問題のある仲裁だが、効果はあった。

「二人とも妥協しないのはいいんだけど、他人の意見をまったく聞こうとしないで、なんか担当を好きにやってる感じ」

と、夏希が説明するも、目の前にあるモニUMENTはすでに真っ白。龍人は白く塗られる前のモニUMENTに興味を覚えたが、それは白ペンキの下に埋没してしまつて、確認できない。

「……事件前の様子を見たいのだが」

「それならデジカメで撮つてたよ。展示してる隣で、制作の様子を流そうと思って」

夏希はそう言うのと、カバンからコンパクトなデジカメを取り出した。ツクシが使っているようなデジタル一眼ではなく、ファインダを使わないことを前提にデザインされたような、液晶ディスプレイがいやにでかいモデルだ。

「昨日の帰りに撮ったのがコレ」

夏希はデジカメを少しいじってから龍人に差し出す。ディスプレイ

イには、青を基調とした半球やら、赤を基調とした半球やらが写っていた。それぞれ違ったイラストが描かれており、統一感もなければ、対照的でもない。評するなら、“すべてにおいて中途半端な駄作”と言わざるを得ない。

「文化祭前のため、新聞部はコメントを差し控えさせていただこう」  
「あ、逃げた」

ツクシはそうツツコミを入れるが、実際はそうではない。“ノーコメント”は、聞いた者に好きな解釈をさせる。それを制作者に言うことは、制作者が心の底で感じていることを、“他人からの忠告”という形で表面化させることができる。いわば魔法の言葉なのだ。  
「……俺のノーコメントの意味はおいという……証言から解つたのは昨日はちゃんとカギを返却したこと。白く塗装されたのは昨日みんなが帰った後から、今朝までの間ということ。昨日の作業中椎名くん和高梨くんがケンカしていたこと……か」

ケンカのくだりに、反応したのはケンカしている二人。

「ケンカしてたからって犯人扱いは……」

「そんなことで犯人扱いするかよ」

文也の言葉を一瞬で否定。当たり前だ。

「言い合いをしてる最中、カツとなつてペンキをぶちまけることはあつても、わざわざ忍び込んで塗装するとは考えにくい」

もちろん“考えにくい”だけで、その可能性もある。龍人は意図的に伏せたが。

「やはりカギになるのは体育館のカギだな。カギさえあれば、体育館は簡単に侵入できる。それこそ、この学校に関係してない人でもね」

龍人の言葉の一呼吸後。その場にいる全員が、何かに気づいて……。

「ん？ みんなどうした……あ……」

龍人は、その“みんなが気づいたこと”が何であるかに気づいた。  
「……一番怪しいの、俺か……」

カギは持っけていても動機を持っけていない。それどころか、今朝まで無関係だった龍人が塗装犯であるはずはない。

とはいえ、最悪に最悪が重なって、さらに奇跡的な何かが起きると、自分が犯人であると言い出しかねない危うさ。それは無関係だった今朝に比べれば、雲泥の差を持っけている。

「やはりカギだ。正規のカギがいまどこにあるか。昨日の作業終了時点から今朝までの間に、何かが起きてるはずだ」

カギは勝手に動かない。返したはずのカギが、返した場所に無いのであれば、誰かが持ち去ったと考えるのが自然である。そうでなくとも、何かが起きているはずだ。

「もしかしたら、こうしてる間にカギが戻ってるかも知れない。職員室をチェックしてくる」

龍人はそう言っけて、職員室へと向かおうとした。

「私も行くよっ！」

ツクシが手を挙げて主張するが、龍人が同行を求めたのは正樹。

「だから私も行くっけて！」

ピョンピョンと跳ねながら主張するツクシだが、龍人は一回、目で合図をするだけで、正樹と共に体育館を出る。

「いいのか？ ツツシ放っけていて」

「ああ。悪い言い方だが、見張りをやっけてもらっけて」

龍人がいない間に、何か変な考えを持つ人間が出るかも知れない。そうさせないための牽制である。

「じゃあどうしてオレ？」

「さっき貸したコピーのカギを持っけてるから」

「……サクリュー……変なこと考へてるだろ？」

「いや、別に」

そうこうしているうちに、職員室に到着。ノックをして返答を待

つて、入室する。

「カギ借ります」

と、夏休み出勤ご苦労様な四十代独身の男性教師（数学科）に告げ、カギボックスを開ける。

カギボックスは、三段、キーホルダを引っ掛けるフックが飛び出した物で、扉の裏にも同様のフックがついている。フックの設置が、扉を閉めたとき互い違いになるよう作られているので、カギが向かいのフックに移動してしまうことはないだろう。

「お、なかなかグッドデザイン」

言いながら龍人は、何度か開け閉めをする。楽しいようだ。

「あと何回で飽きる？」

「もう飽きたから、本題だ。コピーを貸してくれ……じゃない！俺が貸したんだから返してくれ」

「すぐ貸してくれよ」

龍人は体育館のカギのコピーを受け取ると、カギボックスに残っているカギと見比べる。

「何してるんだ？」

「体育館のカギが別のキーホルダに付いてるかも知れないから、見比べてる。今朝だって、キーホルダのプレートに『体育館』って書いてあるカギを探したただけだろ？」

「そりゃサクリユー。さすがにカギのギザギザ見て『これが体育館のカギだ』なんて判るほどカギマニアじゃないからなあ。リローデッドに出てきたカギ職人なら判るかもしれないけど」

「……ネタが古い」

そう言う本人が、先程言った“ゴルゴム”の方が十年以上古い。“赤心少林拳”に至っては、二十年位だ。

「で、体育館のカギは見つかったか？」

「無いね。誰かが借りてるカギもあるが、問題なく使えてるなら……」

途中で言葉を切って、龍人は考え込む。

「どうしたサクリュー。『問題なく使えてるなら、確かめなくても体育館のカギは無い』って言いたいの解るけど、途中で切られると気になるじゃないか」

それを聞いても、まだ考え込んだまま。

「サクリューのバカ」

「おー俺は元気だぞ……って何を言わせる」

「言ったのはサクリュー。何考えてた？」

「ん。霧が出てきた……じゃなくて、ええっと……貸し出し記録に載ってなくて、ここに無いカギがあるかもしれん」

「ここに無いなら無いだろ」

「いや、そういう意味じゃなくて」

貸し出し記録……生徒がカギを借りるときに、日付と借りた時間。生徒の名前、どのカギを借りたかを記述するノートで、カギを返すときに返却時間を記述して手続きは終了する。ほとんど形だけの物で、記述しなくても持つていくことは可能だ。

「って、一昨日の体育館のカギ、記録が無いぞ。誰が借りたか覚えてるか？」

「オレじゃないぞサクリュー。オレは借りたことないからな」

「……こういうのは性格の問題で、ちゃんと書く人は毎回手続きする。昨日は『関山夏希』って書いてあるね。だから、一昨日は関山さんじゃあないと仮定して……」

すると、松平隆幸、椎名雄二、高梨文也のうちの誰かが、一昨日カギを借りたことになる。もちろん、正樹の可能性もあるが。

「あ……思い出した。一昨日はマッペイだったな」

さらにさかのぼって、記録なしで借りる人を特定しようとした矢先、正樹が思い出すというフェイント。だが、調べるより早い。信じれば、の話だが。

「松平くんか。書かない人なんだな」

「関係あるのか？」

「俺がよく言う冗談よりは」

「ところでサクリユー。新聞部の力ギ……」

「え？ 無い？ 俺とツクシはコピー持ってるけど、オリジナルが無くなったら大変……ってあるじゃん」

「あるよ。あるのにどうして部室開いてるのかな……ってね」

「ああ、そういうことか」

「どうして開いてるの？」

「一回言ったから教えてやらん……お、柔道場の力ギ、記録無しで借りられてるぞ」

体育館の隣、体育科教員室や更衣室などがある格技棟の二階。そこが柔道場である。

「柔道部が困ってるんじゃない？」

「主な活動内容が、部室で菓子食いながらマンガ雑誌を読むという部活だから……困ってないだろうな」

「サクリユー決めつけるな。きつと柔道マンガ読んでんだよ」

「柔道マンガで得られる技術は、足でピアノを弾くくらいだろ」

「……宴会芸？」

「実写版では俳優さんがちゃんとやってたぞ。特撮だが」

「……バカ？」

「一応、一世を風靡したマンガとドラマだが……脱線しすぎだ」

龍人と正樹が、ツクシ無しで会話をする、と脱線したまま戻ってこれなくなることがある。脱線させる犯人は、主に龍人だが。

「他には……視聴覚室と和室が記録なしで借りられてるな」

「もしかしたら、そのどれかのキーホルダに体育館の力ギがついてるかも知れないんだな」

「ああ、これから体育館の力ギとそのどれかが似てるかどうか、見比べてみる」

「どうやって？ ここに無いものを見比べられるのか？」

「……マサキ、誰に力ギ借りたか忘れてるんじゃないのか？」

「返したからな」

特に説明する気も起きず、龍人は黙って、校内の大半の力ギがあ

る部屋へ向かった。

「新聞部の部室に行つてカギを確認したら、柔道場のカギと体育館のカギは同じタイプで、パツと見じゃあ見分けられない。念のため柔道場に行ったけど、柔道場は使つてなかった。もしかしたら、体育館のカギは柔道場のカギのキーホルダについてるかも知れない」

「マサキ……なんだその極端な説明口調は？」

「ん。マンガの一話で、こういう説明するキャラ居るじゃん」  
「居るけど要らん。が、そういうわけだ」

体育館に帰るなり、コントのように全員に報告した。もつぱら、報告は全て正樹がやったような物だ。

「ホントにそうなのか？ 柔道部で勝手にパクツてるだけかも知れねえじゃん」

隆幸の指摘ももつとも。

「それはそうだ。でも、互いに『かも知れない』は、どちらも仮定。可能性を全て否定してたら、何も終わらない」

「そうだぞマツペイ。Ｔ字路から子供が飛び出してくるかも知れない運転。子供が飛び出してきたらすぐブレーキで、出てこなければそれはそれでいいじゃないか」

「例えば微妙だな。ついでに、法規としては『Ｔ字路』じゃなくて『丁字路』だ。『十字路』を『Ｘ字路』とは言わないだろ？」

「『Ｙ字路』があるじゃんか」

「それは『三叉路』だ」

「リユート、マサキくん。松平くんが困つてるわよ？」

右折禁止の路地に右折した車両を咎めるように、ツクシがクラクション代わりの警告を発して話を戻す。

「松平くん、すまない……で、君に聞きたいことがある」

「何だ？ 原付免許の試験に出そうなことは忘れっちまったぞ」  
それはそれで問題だ。

「交通じゃないが、三本以上車両通行帯がある道路で、二段階右折禁止じゃないところは二段階右折しろよ……えっと、一昨日、カギを借りたのはキミか？」

「一昨日……？ あー……そうだけど……なんか関係あんのか？」

「いや、カギの貸出記録に載ってなかったからね」

「ここは正樹の記憶通り。裏付けも出来たところで、次の話。」

「で、今朝の登校順について、もう一度聞きたい」

「さっき言っただけど……えっと、まず一条くんが来て、松平くん、そして私……その後椎名くん和高梨くんがほとんど同時だったよ」

「先ほどと大して変わらない証言。違っているところは……。」

「松平くん。関山さんが言った順番で合ってるかい？」

「龍人は隆幸に裏付けを求め、隆幸は首肯で応える。」

「そうか……まあいいか。似たようなものだ」

期待や予想と少し違う返答だった、と言わんばかりのリアクション。

ツクシは龍人の様子に、何かを感じて……。

「リユート？ もしかして……」

「ああ。塗りつぶされて見えなかった物が……見えた」

「……恥ずかしくない？」

龍人はツクシの発言を無視した。

「まず、この件は記事ではない。実際に発生した状況なので、新聞とは違う語り口で行きます。話す順番を考えず、単純に時系列で何が起きたか、俺の推測で話します。途中、事実と反する箇所があれば、口を挿んでください」

言い終わった後、ゆっくり場の全員を見回す。特にリアクションを示さないで、龍人の発言を肯定したとみなし、先に進める。

「まず発端。椎名くん和高梨くんの、お互いが勝手気ままに自分の

作りたい物を作っていた……というところだ」

「……やっぱり、そうなの？」

名指しされたうちの片方。意外にも無口で内気の雄二が口を開いた。

「そうだろうな。多分、この場にいるみんなも、この場にいないクラスの中も……全員とは言わんが、文化祭でモニュメントを展示しようとしたのは、君たち二人が協力しあえば、良いものが出来上がるの考えだろう」

龍人の考えは正しいようだ。少なくともこの場にいるメンバは異論を唱えない。まあ、クラスの中でも意識の高い生徒が集まっているので、当たり前だろうが。

「だが現実はどうだ？ 椎名くん。高梨くん。メインでやってるお二人に訊くが、満足のいく出来かい？」

指名された二人は同時に俯く。……息は合っている。

「……図星かい？」

やはり二人そろって首肯。

「他のみんなは？」

隆幸と夏希は答えない。

「オレは悪くはないかな。でも、気に入ってもない。正直、白くなくてもガツカリしなかったなあ」

正樹は自分の心情を、なかなか上手く表現したものだ。

「それがマサキの意見か。んで、関山さんはどうだい？ モニュメントが白く塗られる前、どう思ってたか……俺が一番訊きたいのは君の意見だよ」

無言。

「黙っていたって解らないよ」

無言。

「本当は、今朝言つつもりだったはずだ。『白く塗ったのは私です』と」

龍人が夏希に対し、問い詰めるような言葉を掛け始めた辺りから、

全員の視線は彼女に注がれていたが……それでも夏希に注目が集まった。

「オイ！ 桜井！ 何犯人扱いしてんだよ！」

隆幸がわめくが、龍人は無視。語りかけられている夏希は未だに無言。

「昨日、キミは彼らのケン力を見て、計画を考えた。作業中にでも抜け出して、柔道場の力ギを無記名で借りる。作業終了後の戸締まりの時に、柔道場と体育館の力ギを、お互いキーホルダを入れ換えて、『体育館』のキーホルダがついた柔道場の力ギを返却。こうして、手元に体育館の力ギが残る」

夏希は相変わらず無言。“間違っている箇所があれば口を挿め”と言っているが、結局のところ、解らない。

「それで、夜にでもハケと白ペンキを持って忍び込む。作業が終わったら、力ギをかけて帰宅。で、終了」

ここで“待て”と口を挿んだのは、隆幸。

「結局忍び込むんだから、そのときに力ギを盗んで、そのときに力ギを返す方が、単純でいいんじゃない？」

「いや、それはムリ。考えてみてくれ。夜、基本的には、学校の全ての部屋が戸締まりされる。通常の教室は開いてるかもしれないが、職員室は校内の力ギがあったり、個人情報宝库。校内でもトップクラスに防犯意識が強い所だ」

「新聞部でも力ギのコピー持ってないトコだもんねっ！」

ツクシが補足。

「ツクシの補足は知らなくても、夜中力ギがかかっていることは容易に想像がつく。実際、昨日も先生が戸締まりをしていたのは、キミがさっき言ったことだろう」

必死に夏希を庇おうとする隆幸でも、閉口するしかない。

「……というか、本当はキミも知ってるんだろ？」

「な……何をだよ……」

隆幸はあきらかな狼狽を見せ、視線もあちらこちらへと定まらな

い。

「今朝の一番乗りはキミだろ？」

「な……なんでそんなこと言えるんだよ。さっきのナツの説明、聞いてなかったのかよ？」

「聞いてたさ。順番は『マサキ。松平くん。関山さん。椎名くん。高梨くん』だね。でも本当は、マサキは関山さんの後なんだよ」

「どうしてそんなことが解る？」

「オウ。オレも疑問だぞ。サクリュー早く説明しろ」

「黙っていても説明するさ。マサキが今朝登校したとき、体育館には誰もいなかった。そして昨日あったハズの体育館のカギ……いや、体育館のキーホルダがついたカギがない。マサキが一番乗りだと有り得ない状況だ。となると、その前に誰かが『体育館のキーホルダのカギ』を持ち出さなければいけない。それが、キミだ」

いつもの調子なら、何か言い返しそうなものだが、隆幸は言い返さない。固まった、という方がしっくりする。

「正確な流れを言うところだ。今朝、誰よりも早く来たキミは、それが体育館のカギではないと知らず、カギを持ち出す。貸出記録は、いつも通りつけないでね」

貸出記録の下りは蛇足かもしれないが、軽く牽制にはなるだろう。「で、体育館を開けようとしたら、開かない。そのシーンを見た関山さんは驚いたハズだ。それで……関山さんは、キミに全てを語った。だがキミは、口裏を合わせて誰かがやったことにしようとした」  
隆幸が口を開く前に、いや、それを制して、口を出した人物がいた。

「隆幸は悪くありません。私が一番悪いんです」

関山夏希が、塗装したことを認めた。

夏希が塗装したということで、雄二と文也が激昂するかと思って

いた龍人だったが、良い意味で予想は裏切られた。危険が及ばぬよう、密かに正樹を二人のそばに待機させていたが、取り越し苦労だったようだ。

「……関山さんが……犯人だったんだ……」

雄二が小さい声を更にミニマムにした呟きは、龍人の耳にもはっきりと聞こえた。

「椎名くん。俺は全てが見えてから、『犯人』という表現はしてないし、この件を『事件』と言ってない」

「なんで？」

「この件は、二年五組の作業メンバ全員が絡んでる。もし『犯人』を挙げるというなら、全員が『犯人』だ」

龍人の宣言に、全員が驚き、説明を求める。夏希も、疑問符を顔に浮かべ、詳細を聞こうとしているのが窺える。

「まあまあ、とりあえず最後まで説明するから、ちゃんと聞いていてくれ。多分、松平くんの提案で、外部犯に仕立てようとしたんだろ。俺の想像では、『悪いのは椎名くん和高梨くんなのに、関山さんが一人で悪者になる必要はない』みたいなことを言ったんだろ。うな」

「……なんでそこまで解るんだよ……」

呟きではなく、もはやボヤキになっている。

「今朝からなのか、前からなのかは知らんが、キミは彼女を庇いすぎる。一緒に作業する仲間だから、ではないだろうな。昨日の椎名くん和高梨くんのケンカも、キミがそれとなく言ってきた。だから、彼女限定だろうと思ってね。そう考えると、そんなシナリオが自然に出てきたよ……って合ってたんだ」

隆幸は“チクショウ”と毒づいたが、龍人は軽く聞き流した。

「で、当初は全員が揃ったあと、先生に頼んで開けてもらうつもりだったんだろうな。いくらなんでも、生徒に貸し出す力ギ以外に、教職員が管理してる力ギがあるはず。それを頼りにするか……別の方法でも、とにかく全員揃ってから開けたかった。みんながモニユ

メントに注目してるときに、カギを捨てて後付けの密室を作るためにね」

その場合、全員が証人にならなければならない。現場保全をしている側に全員がいないと、後付けの密室の可能性に気付く人間が出てしまう。

「ところが、ここでマサキが来て、俺を呼んだ」

「お、ようやくオレが犯人の回だな」

「……嬉しそうだな」

「嬉しいぞ」

表情から察するに、文面通りの意味らしい。

「……で、あるうことが、新聞部がカギのコピーを持っているという、想定外の事態が発生した」

一介の、それも正確には同好会扱い（新聞同好会だと、ただの新聞マニアな感じがしてイヤ……との理由で、通称だけでも新聞部にした）の団体に、校内の大半のカギを持たせておくなど、誰が想像出来よう。

「ねえリユート。それがどう関係するの？」

ツクシは“新聞部がカギを持っていても、結局は体育館を開けるんだから関係ない”と言いたいのだろう。

「ああ、このこと自体は、そう重要じゃない。問題は、新聞部が関わったというところにある」

カギを貸したことで、繋がっていないラインが、繋がってしまった。

「リユート……あんま恥ずかしいこと言わないでね……」

「安心しろ。『俺を呼んだことが最大の誤算だ』なんて、どこぞのキザな名探偵みたいなことは言わん」

「言ってるぞ、サクリユー」

「……否定文に使っただけだろ。俺が言いたいののは、『外部の人間が関わって、話が広まるとマズい』だ」

「……チト解らん。どういうことだい？」

文也が聞き返す。

「おそらく、仮想の犯人、仮に『ケイスケ』と……」

「『X』ね」

ツクシの素早いツツコミに、言葉を詰まらせる龍人。軽く咳払い一つして、再開する。

「全てを仮想の犯人『X』がやったこととして……もし、その『X』が他のクラスの人間だったら？」

少し間を開けて、さらにもう少し間を開けても、誰も答えない。

「……高梨くん？」

「え？ 俺に訊いてたの？」

説明を求めて、自分はまったく考えずに聞くだけ。これではCDでもかけていた方が有意義だ。

「えっと……なんか姑息だな。いない人に擦り付けるなんて」

「ああ姑息だね。戦争すると一時的に支持率が上がるどつかの国みたいに、姑息な手段として『X』を作り上げた。文化祭が終わるまで気付かれなきゃいい……だが、ここで新聞部が来たらどうだ？

記事にされたら、実態を伴った『犯人』が見つかるまで、調査されるかも知れない。たとえ文化祭が終わってから真相が見えたとしても、そのときは『文化祭の話題作りのため』と言われるかも知れない」

まくしたてている訳ではないが、一気に言ったので、あまり意味が伝わっていないようだ。ツクシまでもが、表情に疑問符を浮かべている。

「……要するに、新聞部に限らず、二年五組以外の人間が居てはならなかったのに、それを連れて来てしまったのが、マサキがやったこと」

隆幸は、ため息をつく。

「マサキがカギ借りに行ったときに、ヤベエって思ったんだよ」

それを聞き、龍人は“違うよ”と言って、そして続けた。

「松平くん。多分、関山さんの最初の計画のままが一番良かったん

だと思う」

「そういえば、関山さんの計画って何？」

ツクシが口を挿む。

「……一切合切を説明して、仕切り直す……ってことだよな？」

夏希に向けて、言う。

「うん。『このままじゃダメ……みんな、もっと全体のこと考えよう』……って、言うつもりだったの」

それが夏希の計画。いや、願い……メッセージ。

「松平くん。彼女の保身を最優先にしたのが間違いなんじゃないかな。彼女の計画なら、ちゃんと説明すりゃ問題は無かったんだぜ？」

「……そうかも。余計なことしたかもしれねえな。ゴメン、ナツ」  
「ううん。椎名くん和高梨くんが白くなったモニメント見て、そしてケンカを始めたから……その時にちゃんと説明できたのかは、今でも判らない」

結果的にはこれで良かった。

龍人は“みんな頑張ろう”と、率先して作業を再開した雄二と文也を見て、そう思った。

もうお役御免だと、部室に戻ろうとした龍人を引き止める者がいた。

「サクリュー！」

一条正樹である。

「なんだ？ もういいだろ？」

不承不承振り返ると、正樹は頭を下げた。

「ゴメン。無理やり連れてきて……話ややこしくさせたのはオレだ」  
いつになく真剣な表情。

「ま、予想出来ないからな。仕方ない。それに、今回はみんながみんな、それぞれがいい結果を生もうとしてなったことだ。でもみんな少しずつ問題があって……ただそれだけだよ」

自分が作るものこそベストと、力を合わせることをしなかった雄二と文也。

どんな意味が解らないものになっていくモニュメントをリセットするため、誰にも相談せず、強行によって間違いを指摘しようとした夏希。

夏希が悪者扱いされるのを避ける。ただそれだけのために、外部犯を仕立て上げようとした隆幸。

さつさとカギを開けて作業を始めようとした。自分達がつづいてる物にイタズラをした犯人を探すため、新聞部を連れてきた正樹。客観的に良いか悪いかはさて置き、どれもそれぞれが、それぞれのベストを目指したこと。

どれが一番悪いと、はっきりは言えない。

「んー……難しい話は勘弁してくれ。それはオレの係じゃない」

「ま、単純に絶対悪はそうそう無いってこった。んじゃ、作業頑張ってくれ」

と、きびすを返して部室に向かおうとする龍人だが、やはり再び正樹が引き止め、結果三六〇度ターン。

「正義とか悪とかはもういいから、余ってる新聞くれ」

「……ゴメン、文脈がよく理解出来ない」

「じゃあ『余ってる新聞くれ』だけにする」

「何故？」

「文脈にモンク付けたのはサクリユーだろ」

「『何故』は『余ってる新聞くれ』だけに係る」

「なんだそういうことか。ほら、今二重にペンキ塗ってあるだろ？厚くなってるし、紙の張り直しからやろってなったんだ」

なるほど。モニュメントは木で型を組んで紙を張り、塗装する手法で作っているらしい。

「……俺とツクシが丹精込めて作った新聞を、そんな風に使おうと言ってるのか？」

睨みつける龍人だが、正樹は全く動じない。

「うん。そんな似合わない顔しないで、古新聞くれ」

龍人は表情を一転。笑顔に変える。

「ああ、予備分やミスプリント、合計すれば大量にある。いくらでもやるよ」

新しいからこそその新聞でありニュースである。つまり、いくら丹精を込めて作ったものでも、古いものは役に立たない。

そんなものでも、使い道があるのなら、欲している人間に渡せばいい。

古いものでも、新しいスタートに使えるのなら、断る理由など、どこにもない。

（後書き）

携帯電話で読むには少々長い作品ですが、お読みいただき、ありがとうございます。

…… なんと季節外れな作品…… 師走も間近に夏休みって……。

書き始めはその時期なんですがねえ…… 3ヶ月もかかってますよ。

まあ、かけた時間が作品の良し悪しに比例するなんて全く思ってません。

…… さ、また書き始めるか。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

また、どんなことでも感想戴けますと、大変励みとなるので、ぜひ一筆と、お願い申し上げます……

またお会いできる日まで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1938b/>

---

真っ白け

2010年10月8日15時05分発行